

Eureka IX

六年制通信 No.30 令和4年1月8日(土)号

年の初めに

明けましておめでとうございます。今年はどんな一年になるのか、あるいはどんな一年にするのか、いずれにしてもワクワクしながら過ごせるといいですね。

終業式で話した「除日起講」(じょじつにこうをおこす)、ちゃんとできましたか。一、二年生の諸君は朝礼など六年制全員の集会を知らないから、この話初めてかもしれませんね。ですから「引っかかるかな」と言いましたが、あの時私は大晦日に勉強をスタートしなさいとは言っていないのですよ。そう聞こえたでしょうけど。終業式の日、つまり「除日起講」を聞いたその日から、家に帰ったら机に向かえと言っていたのです。私は約束通り勉強しましたよ。24日の夜から始めました。大晦日にスタートすればいいと、引っかかった人も少なくなったでしょうね。話を聞いた、その日から始めればいい、それが正解でした。「思い立ったが吉日」とも言いましたよね。

さて、**Truth stands repetition.** (これも知らないか。「真実は繰り返しに耐える」という意味。ですから正しいと信じることは何度言ってもよい、ということ) ですからね。年頭に当たって、大切なことを繰り返して書いておこうと思います。

学校で勉強する意味は、自分一人では到達できない領域に仲間と一緒に進むことができるからです。自分一人で勉強するのが本来の姿だという人もいますが、私は、確かにそういう面もあると思いますが、というか一人で勉強しなければならない場面もあるだろうと思いますが、それは極めて個人的な領域に限られるのではないかと思います。学校に通っている君たちは、やはり仲間とともに成長すべきです。仲間の成長を肌で感じながら自分も成長していくのです。そういう意味で、学び舎に集まって勉強することが必要なのです。仲間が大切だという意味もそこにあります。そして同じ制服を着る意味も。だって制服は仲間であることの一つの証ですからね。

勉強して身につけるべき資質は「辛抱強く学ぶ意欲」です。これを身につけることが教育の根本だと私は考えています。これさえ身につけば大丈夫、大学でも社会に出たあとでも勉強を続けていくことができます。大人になっても学び続けることができます。日本人は大学を卒業すればほとんど勉強しなくなるという統計があります。ちょっと残念ですね。前にも言いましたが、学歴とは18歳でどこに入ったかを言うのではなく、生涯何を学び続けてきたかを指すべきです。ですから死ぬまで学歴は完成しません。君たちには本当の意味で誇れる学歴を作り上げてほしいと思っています。

教育を受けた(受けている)者には、それに相応しい言動をとる責務があります。いつも言っている **Educated Action** ですね。私は細かい規則を作らないと生活できない

集団が嫌いです。あれはダメこれもダメと、いちいち言われないと、注意されないと、正しい行動がとれないというのは教育を受けなかった者のすることです。君たちはこの中高で教育を受けています。しかも自分から進んでここに来たのですよね。君たちの選んだ制服に相応しい言動とはどんなものか、少し考えればわかるはずですよ。そしてそれを実行することは決して難しいことではありません。

昨日の自分と今日の自分、今日の自分と明日の自分、ほんの少しでいい、その成長だけを考えなさい、これも何度も言ってきた言葉です。ただ、一日の変化は微々たるものですから、一月前の自分、半年前の自分、一年前の自分、それらを思い返して成長を感じることも大切ですね。君は入学してどのくらい経ちましたか。そしてどのくらい成長しましたか。言葉にできますか、自分の成長を。

「学問の大禁忌は作輟なり」（がくもんのだいきんきはさくてつなり）、これも事あるごとに言ってきました。吉田松陰の本に佐久間象山の言葉として載っていました。大禁忌とは「やってはいけないこと」、作は「する」、輟は「しない」つまり、勉強するうえで絶対にしてはならないことは勉強をしたりしなかったりすることだ、と言う意味です。勉強は継続しなくてはいけないという戒めの言葉です。年の初めに、日頃から何度でも言いたいと思っていることを書きました。また何度でも繰り返すつもりです。

さて諸君、今年は憧れの人物像をはっきり持ってみましょうか。こういう人になりたいという、自分の理想像ね。空想の世界ではなく実在の人物で。歴史上の人物でも今生きている人でもいいですよ。そして学校の勉強とは別に、その人に近づくための自分だけの努力を始めてみましょう。ただし10分以内で。新しいことを始めるには急に大量に時間を投入しない、いわゆるスモールスタートが長く続けるコツですからね。

今週のおすすめ

・知念実希人 『仮面病棟』（実業之日本社文庫）

私は先に映画を観ました。ああいう作品は坂口健太郎、永野芽郁のW主演というのでしょうか。知りませんが。面白かったので原作を読んだのですが、この原作から映画にすると、なるほど映像ならそういう設定に変えた方がいいのか、などと感心してしまいました。原作でも映画でも、主人公の青年医師がすぐに気がつくべきところに鈍感だったりしてイラッとしますが、ま、それも愛嬌ですね。倫理の外れた、しかも腕のいい医者ならひょっとしてやってしまうのではないかと、いや世界を見回せば実際にこんなことがあっても不思議ではないのかも、などと考えてしまいました。ミステリーの要素もちゃんとあって、原作も映画もなかなかスリリングに仕上がっています。

また、同じ著者で『時限病棟』も面白かった。『仮面病棟』を先に読んでいてよかった。あれから数年後、事件の舞台はすでに廃屋となった同じ田所病院。5人の男女が監禁されているところからストーリーが始まる。こっちの方がスリリングでした。私は「脱出ゲーム」というのを知らないのですが、このゲームのファンの人なら私の何倍も楽しめるでしょうね。最後、犯人について、半分予想が当たって半分見抜けなかったな。それは無理があるんとちゃうの、というのが少しありますが、面白い作品です。欲を言えばラストシーンからの補足を書いてよかったのではないかと思います。

BGMはWGB（和楽器バンド）の*Starlight*でした…。